2．免疫細胞療法の現状　司会　白鳥敬子　清水公一

3．癌化学療法の個別化—テーラーメード化学療法をめざして—　司会　有賀　淳　内田数海

VII．指定講演　司会　林　和彦

肝切除における出血量軽減の工夫　座長　高崎　健　大坪毅人

VIII．総括発言　名誉所長　中山恒明

IX．閉会の辞　消化器内科教授　白鳥敬子

劇症肝炎患者におけるTNF遺伝子の多型性（SNP）の検討

（消化器内科）土屋典子・徳重克年・長谷川潔・橋本悦子・山内克巳・白鳥敬子

〔目的〕TNFを始めとするサイトカインの産生は個人差があり，その遺伝子多型によりサイトカイン産生能が影響を受けることが明らかとなってきた．今回劇症化に密接な関与が示唆されているTNFのSNPを検討し，劇症化に及ぼす影響を検討した．〔方法〕急性肝炎（AH）患者，劇症肝炎（FH）患者，健常者（control）群を対象とし，検討した箇所はTNF-α promoter領域のposition-238，-308，-857，-863，-1031とTNF-β geneのfirst intronのSNPである．また，健常者リンパ球でTNF-αの産生能に関しても検討した．〔結果〕①FH群のうち予後不良群では，TNF-α promoter region position-1031C，-863A，TNFβ gene B2の保有率が有意に高かった．②病因別にHAV群，HBV群，HCV群，NANBNC群に分類して検討したところ，NANBNC群において，TNF-α promoter region position-863AとTNF-β gene B2の保有率がcontrol群に対し，FH群で有意に上昇していた．③健常者におけるリンパ球刺激試験では，TNF-α promoter-1031C，-863A，TNF-β gene B2/B2の保有者ではTNF-αの産生能が高い傾向にあった．〔結論〕TNF遺伝子のSNPはTNFの産生能を介して劇症肝炎の予後に関与している可能性が示唆された．

腫瘍特異的および非特異的免疫応答を併用した複合免疫細胞療法の開発

（東京女子医大大学院 医学研究科 がん免疫細胞治療学分野）松下典正・田中宜之・中尾真修・有賀　淳
（J.B. Therapeutics・癌免疫療法研究所）谷川啓司・小林泰信
（東京女子医大 消化器病センター外科）高崎　健・清水公一・武下信啓・小寺由人

〔目的〕癌細胞の腫瘍関連抗原やMHC分子の発現の多様性に対応するために，末梢血単核細胞より樹状細胞，T細胞，NK細胞を分離培養することを目的とし，基礎研究を行った．〔方法〕健常人および担癌患者末梢血単核細胞（PBMC）からNK細胞（$CD16^+$，$CD56^+$，$CD3^-$）を多数含む細胞群（A-LAK）を分離培養し，細胞傷害性等を検討した．〔結果〕健常人PBMCからは，樹状細胞，NK細胞（A-LAK），T細胞（CAT）を分離培養することが可能であり，CATと比較してA-LAKは非特異的な細胞傷害活性が高値であった．担癌患者PBMCより得られたA-LAKでは，NK細胞を多数含む細胞群と$CD3^+$，$CD56^+$，$CD16^-$が優位な細胞群に分類され，細胞傷害活性は前者の方が優れていた．より効果的なA-LAKの培養にはNK細胞のpurficationが重要であると考えられた．

胆管浸潤型肝内胆管癌の外科病理—臨床像および治癒切除例の検討—

（消化器外科）今井健一郎・山本雅一・高崎　健

〔目的〕胆管浸潤型肝内胆管癌（浸潤型）の切除成績の検討から，治癒切除症例の成績が良好であることをこれまで報告してきた．今回，浸潤型の切除症例の臨床病理像を検討し，治癒切除例の臨床的背景を明らかにした．〔方法〕浸潤型切除21例を治癒，非治癒に分け，画像，背景因子，発見の契機，腫瘍マーカー，病理所見について比較した．〔結果〕治癒切除例は，胆管像における胆管浸潤の進展範囲が対側肝管に及んでおらず，無症状のうちに検診が発見の契機となった症例が多かった（$p<0.05$）．〔結論〕検診などで限局性肝内胆管拡張を認めたり，肝胆道系酵素の上昇を認めた場合，胆管浸潤型肝内胆管癌の存在を疑って，精査をすすめることが重要である．

胆管内発育型肝内胆管癌と肝嚢胞腺癌の臨床病理学的検討

（外科32期）富岡寛行

〔目的〕近年注目されている膵のIPMT，MCTに類似した肝腫瘍は従来胆管内発育型肝内胆管癌もしくは肝嚢胞腺癌と診断されてきたが，鑑別に苦慮する症例も少なくない．そこで今回当科において胆管内発育型肝内胆管癌および肝嚢胞腺癌の診断のもとに切除された症例の臨床病理所見を再検討した．〔対象〕2004年1月までの当科での19切除例を対象とした．〔結果〕肉眼像では嚢胞腺癌と診断されてきた症例は嚢胞型と嚢腫状拡張型